

令和元年度 第2回帯広市緑化審議会専門部会 議事録（概要）

- 1 日 時 令和元年6月3日（月）10：00～11：15
- 2 場 所 帯広市役所10階第2会議室
- 3 出席委員 坂本委員、高橋委員、橋本委員、松田委員、宮崎委員 5名
- 4 事務局 和田部長、石塚道路担当調整監、樂山課長、中村公園管理担当課長、金山公園管理担当課長補佐、小丹枝みどりと花の係長、中村管理係長、園枝整備係長、丹羽主任、小泉主任、下森主任、伊藤主任補、追杉主任補、佐藤係員
- 5 議事概要

- ・帯広市のみどりに関するアンケート調査結果について

事務局 「帯広市のみどりに関するアンケート調査」の結果について報告する。

アンケートの概要について、アンケート配布数 2,500 名に対し、有効回答数は 966 名であり、回答率は約 38.6%であった。性別は、男性約 45%、女性は約 55%となっており、年齢は過半数が 60 歳以上、居住形態は持ち家が 70%近くであり、帯広市内に 20 年以上在住している回答者が全体の 70%以上を占めている。

ここからは主要な項目別の回答傾向として、5つのテーマに沿って説明する。

1. 中心市街地（帯広駅周辺）のみどりの豊かさについて

「住まいのまわり」及び「帯広のまち全体」については、みどりが「豊か」もしくは「どちらかといえば豊か」という回答が合計で7～8割を占めている。

中心市街地（帯広駅周辺）については「どちらかといえば豊かではない」と「豊かではない」を合わせた回答が約半数となっている。

また、「中心市街地のみどりを増やしたほうが良い」という声が全年齢層・全地区共通で最も要望が多い項目であり、「中心市街地の緑化」について市民が課題と感じていることが読み取れる。

補足事項として、自身の「住まいのまわり」のみどりが「豊か」もしくは「どちらかといえば豊か」と回答した回答者の比率は、農村地区を除く地区別で見ると特に西帯広地区と南地区で多い結果となり、この回答結果は、平成 29 年度に実施した「緑の基本計画・基礎調査」における地区別の「緑被率」「緑視率」の結果とも連動しているため、これらの数値に相関性があることが読み取れる。

2. 公園・緑地・帯広の森の魅力向上・多様な利活用について

「市内全体の公園数」に関しては、「公園の数はちょうど良い」との声が全年齢層・全地区において最多の回答数となっていることから、公園の数については、年齢・地区等に大きく偏ることなく、概ね市民の満足を得られているものと考えられる。

一方、最近利用した市内の公園は、「緑ヶ丘公園」が全年齢層・全地区共通で多くの回答を得ていたのに対し、全体で二番目に多い回答が「公園を利用していない」であり、これら「公園を利用していない」市民を公園へと導くきっかけづくりなどが、今後の課題として読み取れた。

また、「公園が活用されていない理由」「公園利用者増加のために求める施設」としては、全年齢層共通して「魅力的な遊具・運動施設」「カフェなどの飲食施設」である一方、特に40歳代以上は「ベンチやあずまやなどの休憩施設」を求める声も多くなっており、利用者の年齢層により、ニーズが異なることが読み取れる。

「公園の利用目的」に関しては、全年齢層共通して「散歩」という回答が多かったものの、20～40歳代においては「遊び（遊具）」、50歳代以上においては「町内会行事」という回答が多いなど、年代によって利用実態に違いがあることが読み取れた。

また、「公園などで参加したいイベント」としては、全年齢層共通して「マルシェやお祭りなど」の回答が非常に多かったことに加え、20歳代と50歳代では「音楽鑑賞や映画鑑賞」が二番目に多い回答であったほか、20～40歳代では「子ども向けの自然遊びや環境教育イベント」、50歳代以上の中高年層では「花いっぱいイベント」を求める声も多く寄せられており、年齢層別に様々なニーズがあることが読み取れる結果となった。

3. 公園樹木・街路樹・歩道の植樹ますなどの維持管理について

「公園樹木・街路樹の管理」に関しては、公園樹木の管理で優先して欲しいことは、概ね全年齢層共通して、「枯れ木、老木、生育不良の樹木の更新」「枯れ葉・落ち葉の清掃」であり、街路樹の管理で優先して欲しいことは「支障となる高木の剪定・伐採」「枯れ葉・落ち葉の清掃」「歩道の植樹柵や芝生の草刈・除草」であった。

また、「公園樹木や街路樹を守り育てるために有効な取り組み」に関して、公園樹木については「清掃などのボランティア活動の促進」や「市民協働による草刈、除草などの強化」が有効であるとの意見がほぼ全年齢層共通で寄せられている一方、街路樹については「歩道の植樹柵や樹木の配置の見直し（もしくは廃止）により、管理の質を高めるべき」といった意見や、「清掃等のボランティア活動の促進」が有効である、との回答が年齢層を問わず多い結果となった。

このような傾向から、「公園樹木の管理」と「街路樹の管理」は別のものとして捉えている市民が多く、「公園樹木」についてはボランティアもしくは市民協働による管理を行うべき対象である一方、街路樹については、状況により、植樹柵や樹木の配置の見直し・廃止を進めるべきであるとの意見が最も多く寄せられており、今後の管理方法の見直しを検討するにあたり、参考となる意見と考えられる。

4. 市民協働によるみどりづくりについて

「過去1年間で参加・実施したみどり関連の活動」としては、全年齢層・全地区共通して「個人で庭や菜園づくり」や「ベランダや室内での植物の育成」が多く、回答者個人の以前からのみどりへの関心の高さが伺える。

一方、「活動に参加・実施しなかった理由」としては、「参加する時間がない」に次いで「実施していることを知らなかった」という声が60歳代までに共通して多く、このような回答傾向から、イベントや事業に関する市民への周知に関して課題があることが読み取れるほか、70歳代以上については「肉体的な負担が大きい」が最も多く、シニア世代の課題についてもうかがい知ることができる。

また、「帯広市の管理するみどりについて知りたいこと」としては、全年齢層共通して公園の施設や、イベント情報を求める声が多く寄せられたことから、このような声を踏まえ、市民への周知方法や内容を工夫していくことが「市民協働によるみどりづくり」を進めていくうえで重要であると考えられる。

5. 将来の帯広市のみどりづくりについて

「将来の帯広市のみどりについて」は、「年代を問わず誰もが利用しやすい公園やみどりを守り育てる」という回答が全年齢層共通で多かったほか、20～40歳代では「子どもが利用しやすい公園やみどりを守り育てる」、50歳代以上では「みどりを積極的に増やすよりは、今あるみどりを大切に守り続ける」という意見が多く寄せられた。

自由回答も含め、アンケート結果全体を通じて、今後の帯広市のみどりは「量的整備より質的管理」を優先して考える市民が多いという傾向が読み取れる結果となった。

部会長 アンケートの考察の前に、今回のアンケートの回答をした方について、年齢層が高いという傾向があるが、一般的に子供を育てている世代の方達も公園を主に使っているため、若い人の意見が反映されないということは避けなければいけない。

委員 街路樹の管理について「歩道の植樹ますや樹木の配置を見直す（廃止する）ことによって管理

の質を高める」という回答がとても多い結果となっているが、市民の方達は具体的にどのような状態をイメージしていると考えているのか。

事務局 大きく分けて2つの意見があると考えている。

1つは全ての路線に街路樹があるのではなく、この路線は街路樹の植える路線、別の路線は木をなくして花を植えるというように、路線ごとに管理の仕方を分け、質の高い管理をしようというものである。

もう1つは街路樹を植栽して40年以上が経つ中で、短年で大きくなっていく樹種や枝にトゲがある樹種、落ち葉が多い樹種などが植栽されているため、そうした樹種をなくして違う樹種に変えてもらいたいというもの。

部会長 木をなくしてほしいのではなく、多量の落ち葉や大きい葉の樹種は避けてほしいと考えているのだと思う。

委員 街路樹には、大きな葉や実が落ちるなど様々な問題があるが、微気候と呼ばれる狭い空間の騒音や風、振動を防いでくれる。本州では良いケヤキの屋敷林がある家は名家と呼ばれるように、屋敷林には自分の家の微気候を変える役割がある。また、阪神大震災の時には豊かな街路樹のおかげで火を防いだという前例もある。自分の家に落ち葉が入ると嫌がる人も多いのは、街路樹が火事や騒音、振動などを防ぐという要素についての理解が少ないからではないかを感じる。

部会長 アンケートの中で、イベント等の情報を求める声があったことから、市民への理解を深めるアナウンスというものはとても大事になってくる。

委員 樹種の更新も必要なことであると思うが、聖徳記念絵画館のイチョウ並木のように、凄い量の葉が落ちているところでも人を呼び、喜ばれる場所もある。そうした要素も理解してもらいながら、取り入れていくことも必要。

委員 きれいに色づいた木を見て楽しんだり、落ちた木の実を小動物や小鳥が利用したりといった良さを認識してもらい、落ち葉を活かしていくこと、美しさをもらってお返しに自分たちが落ち葉を集めてきれいにしてあげるという意識を持つことも大事ではないか。落ち葉が嫌いだというだけではなく、寒さや雪を利用したイベントがあるように、落ち葉対策も落ち葉を活かして利用するという意識を持った方が良い。

部会長 北海道は自然が豊かすぎて、本州や東京の人と比べるとありがたみを感じる方が少ないのかもしれない。

紅葉や新緑が綺麗だという一方、虫や落ち葉に苦情がでるように、何事にもプラスとマイナスがあることもアナウンスする必要があると感じる。

委員 アンケートの中で、落ち葉の回収を無料にしてほしいという回答があり、無料で回収してくれ

ることを知らない人もいるようだ。そうした周知も徹底したほうが良い。

委員 ここまでは高木の街路樹の話をしてしたが、低木の街路樹の中には、子どもが飛び出しても分らないような大きさの木がある。アンケートの中でも子どもが飛び出していて危ないという回答があったため、地域を限定して試験的に、高木はそのままにして低木をなくし、どのような影響が出るのかをしてみるなどの取り組みも必要ではないかと感じる。

部会長 地域エリアごとに雰囲気は違うが、直接的に子ども達にとって危ないというのは、子どもがいる家から見ても、ドライバーから見ても気になる部分であると思う。こうした危険を取り除くということは、みどりの質を変えることに繋がっていくことにもなる。

委員 緑ヶ丘公園等の公園施設について、子どもを連れている方が一番心配なのは、安全・安心・清潔なトイレだと思う。また、ちょっとしたワゴンで軽い飲食ができれば喜ぶのではないかな。

部会長 アンケートで一番公園に必要とされているのがベンチ・トイレ・日陰・休憩所となっている。意外と児童遊園の回答が少ないが子育て世帯の回答数が少ない面もある。そういう部分を差し引いても、トイレや休憩所が必要とされていることは確かであり、お昼を食べる場所や提供してくれる場所も必要とされている。

委員 遊具をたくさん置くと点検や整備が大変といった部分もあるので、芝生で子どもたちが遊び、それをベンチや休憩所で親が見て楽しむというのも良い。

部会長 帯広の市街地の公園は他と比べても立派であるし、世界的に見ても観光資源となる可能性を秘めていると思うが、実際には海外の方を含め、観光客はあまりいないように思える。インスタ映えと言われるように、写真に映えるような場所があれば、観光客が通り過ぎてしまわないような場所になると思う。

委員 公園は汚れていたら行かないし、さらに汚く使ってしまうような場所であるので、常にきれいにしておく必要がある。グリーンパークのようにベンチだけで施設がなくても、充分遊ぶことはできるので、最低限必要な施設を用意し、緑や虫や鳥といった自然を楽しむ意識を持ってもらうことも必要となる。そのためにも、小さいうちから学校や保育所でのみどりに関する教育を広めていくような取り組みが大事になってくる。

部会長 施設を新しく作っても、今ある物の管理やメンテナンスが疎かになっていると、利用されにくいものになってしまう。それは人工物も木などの植物も同様に考えていくべきである。

委員 アンケートの中で利用する代表的な公園は緑ヶ丘公園が一番多いが、西帯広公園などの重点的に整備された公園も回答されている。公園遊具が必要な若い年代の方は、遊具がある場所の情報を自然と集めて利用していると思う。

委員 アンケートを見て感じたこととしては、使いやすい公園にしてほしいということの他に、アレ

アレルギー性の植物の植栽をやめてほしいという意見もいくつかあるということであった。

また、子育て世代の方にとって、天気が悪いときや冬季間の遊び場がないという問題があるというのを改めて感じた。

部会長 冬季の遊び場については、北海道という場所ではなかなか難しい部分ではあるが、考えていく必要があるかもしれない。アレルギーについても樹種の質を考えるとという意味でも配慮しなければいけない部分である。

委員 動植物が生息・生育できる緑のネットワークを守るという考え方があるように、みどりばかりではなく魚や動植物、昆虫等もひっくるめた取り組みも頭に入れる必要がある。

部会長 施設やベンチなどに注目が行き過ぎて、自然に見えて人工的で不自然な環境になってはいけない。帯広は昔、平らで水がいっぱいある湿地という環境だったので、そこに本来いたはずの生き物がいるような環境を守るということも、忘れてはいけないことだと思う。

委員 アンケートの回答の中で、バス停が雑草だらけで座る場所がないという声があった。みどりと直接関係はないかもしれないが、バス停は市が管理しているのか。

事務局 ベンチや待合所については、バスターミナルを除いて基本的に交通事業者が設置している。また設置場所が歩道であるため、全ての場所にベンチや待合所を設置できるわけではないようである。

近年は大型スーパーや病院などの近くのバス停に広告付きの待合所を設置して、費用負担を少なく待合所を増やす取り組みがあり、帯広市の地域公共交通網形成計画の中で待合環境の改善に向けた検討を進めている。

今回のアンケートについては、商工観光部にもこうした意見があるということをお伝えさせていただく。

・次期緑の基本計画の目標と基本方針について

事務局 1. 緑の基本計画 目標と基本方針

現在の緑の基本計画では、緑地の保全及び緑化の目標に「緑被率」「緑地率」「市民1人当たりの公園面積」「植樹本数」を掲げ、みどりの量を増やすことで、計画の進捗状況を検証してきたが、次期計画では、数値目標による目標設定ではなく、緑の将来の目指すべき姿「緑の将来像」を、目標となる姿として設定したいと考えている。

ただし、数値目標を持たないということではなく、各施策の進捗状況を検証するために、施策の「指標」として用いていきたいと考えている。

どのような指標にするかは、次回の施策体系の検討とともに、一定の考えを示していきたい。

基本計画の方針を定める中で考える緑の将来像は、「森と清流に生まれ 人と自然にやさしい みどり豊かな田園都市 ～22世紀の礎、みどり文化を次世代へ～」としている。

これは、みどりに対する大きなコンセプトであり、今後も変わるようなものではないことから、現計画を引き継ぐこととして、次期計画においても帯広の緑の将来の目指す姿として設定したい。

緑の基本計画の基本方針について、現在の緑の基本計画は、5つの基本方針を設定している。1は市民協働による緑化に関すること、2は緑の保全に関すること、3は住宅地など身近な場所における緑化に関すること、4は河川緑地、公園など都市環境の基盤となる場所における緑化に関すること、5は道路や福祉センター、学校など、公共施設の緑化に関することが示されている。

次期緑の基本計画の記載としては、基本的には現計画の方針を引き継ぎつつもいくつか統合し、新たな方針を加えることにより、基本方針を4つにまとめている。

また、基本方針と施策体系を関連づけ、基本方針に基づき施策が行われていることがわかるような構成とするため、「基本方針」「施策の柱」「想定される施策」など、基本方針にぶら下がる形で施策を設定している。

内容については、1は、市民協働のみどりづくりについて、現計画に多少の文言修正を加えたもので、内容は現計画と同様となっている。

2は、現計画の3、4、5の内容を統合したもので、住宅地などの身近な場所、河川緑地、公園などの都市環境の基盤となる場所、道路や福祉センター、学校などの公共施設におけるみどりづくりについて記載している。

3は、現計画の2に維持管理を追加し、緑の保全と維持管理についての内容となっている。

4は、現計画にはない新規のもので、みどりの多様な機能を活かした利活用や魅力アップ、多様な分野との連携などについての内容となっている。

2. 緑の基本計画 施策の体系

基本方針については、現計画をベースに新たな視点を盛り込む形で作成したが、施策の体系については、現計画の複数の施策を統合するなど、分かりやすく示している。

アンケート結果などを踏まえ、新規または拡充して取り組んでいきたいと考える内容としては、多世代が憩える公園整備や、公園の機能強化など魅力向上に資する整備、魅力アップの一つの取り組みとしてキッチンカーの活用、適正管理計画などに基づいた市民協働による樹木や公園施設の維持管理、みどりの多様な効能と、みどりや公園の多様な活用など利活用に関することなどがある。

生物多様性への配慮という部分については、アンケート結果からは生物多様性に対する関心の高さは伺えなかったものの、次期計画で新たに取り組むべき内容と考え、追加している。

部会長 全体として、1番大きなところは数値目標として具体的な数字を出すということ、もう少し柔軟に対応出来るように、縛ってしまわないようにしたいという方向性ではないかと思う。

委員 時代の変化に対応した公園の整備や生物多様性への配慮、みどりや公園の多様な活用、みどりを活用した教育や子育て、様々な分野との連携、こういったところがアンケート結果に基づいて作られているのは良いと感じた。

委員 施策の体系にあるキッチンカーについては、官民の境界線をなくして相乗効果を得るという形で、充分効果が狙えるのではないかと思う。

公園を利活用するイベントや維持管理については、全てを市で行うのはすごい負担になるはずなので、企業や学校に声を掛け、全市的にやっていく必要があるのではないか。

そうしたことの周知については、スマートフォンの活用や高齢者には町内会の機能を活かして伝えるなど、色々と考える必要があると思う。

部会長 公園のイベントの実施について誰がやるかということはとても大きな話だと思うが、どういうイメージをしているのか。

事務局 まずこちらがみどりの多様な効用や活用の方法などの情報発信を強化していくことで、そこからみどりに関わる人達が増えていき、そうしたみどりに関わる人同士の交流が広がって、そこから新たな取り組みが生まれていって欲しいという考えがある。これからは団体の方等、様々な方々が公園を利活用してイベントを開催するようになれば良いと考えている。

全国の公園ではこういったイベントをやっているということ、例えばホームページで紹介することで、それらを見てイベントの主催者がこういうことやっていいんだということが分かればどんどん広がっていくのではないかと思う。

委員 札内川のクリーンウォークではボランティア活動をした後、皆でジンギスカンを食べる。こうしたことも皆での意識を共有に繋がっていくので良い。

部会長 「こういうことが出来ますよ、誰か主体的にやってくれる人を求めます」という情報発信も大事であるし、実際にやるに当たっての情報発信というのも大事になってくる。

また、今までどおりホームページというのではなく、SNS等で拡散していった勝手に誰かが宣伝してくれるような新しい情報発信の方法も追加していくべきであるので、基本計画への書き方も今まで通りだけではなく、SNSと明記するなど新しい方法を取り入れていくというような文言も入れたりすると良い。

委員 民間活力の活用については具体的に示されているわけではないので、もう1歩踏み込んだ表現

にしても良いのではないか。

事務局 具体的にどのように活用するかを伝えられる段階にはなっていないが、現在でも指定管理者制度を導入している中で自主事業を進めてもらっていることや、それ以外にも民間活力を導入する方策はあるので、今後も検討しながら進めていきたい。

委員 今回追加した部分で生物多様性について、一般の方の意識が低いという印象がある。生物多様性については環境省でもよく言っているが、帯広市でこれまで持っていた植生や動物・昆虫等を次世代に引き継ぐという要素がある。しかしこの言葉だけでは市民の方には響かない。

次の世代の子ども達に種を保存する重要な要素があるということをしっかりと周知して欲して欲しい。

部会長 生物多様性というのは生き物を次に守って行きましょうっていうだけのこと。しかし生態系というのは繋がっているので1個の生き物を守るためには、その周りにはいる生き物全部を守っていかなければいけないということである。生育環境ごと守るというような分かりやすく理解できる表現を考えた方が良い。

委員 環境教育の場としてのみどりの活用については、現在もはぐく一むでそうしたプログラムを活用している。学校からも様々な問い合わせがあるため、そういう部分を盛り込んで情報発信を行っていったら良い。

部会長 環境教育の場としての活用の部分は、学校と連携する部分が伝わる表現にしていった方が良い。帯広が好きで地元に残る人も多いので、10数年後に親になることを考えても、子どもの頃に経験する環境教育というものは効果的であると思う。

委員 帯広の森について、50年前からの話なので市民も忘れてきている部分もあると思う。他に前例のない多くの人達が協力した誇りとなるものなので、もう少し大々的に取り上げてほしい。

事務局 帯広の森については次期緑の基本計画の施策の体系の中では1番手に持ってきている、帯広の森は帯広市民のアイデンティティーになり得るものと思っているので、意識的に情報発信していきたい。